

# 結婚と妊娠、 出産、子育てという 意思決定支援に かかわって

●神奈川・特定非営利活動法人UCHI 牧野賢一

これまで地域生活支援に携わる中で、知的障がいのある人が家族をつくるというニーズをめぐっての緊要な「意思決定支援」として、生活をともにすることから妊娠・出産・子育てに至る過程での支援に直面してきました。親元に帰ることができない児童養護施設を卒園した人がグループホームで暮らしていくことから始まった支援については、本誌2005年4月号と同11年5月号に寄稿しまし



## 二人が利用する支援

- グループホーム（暮らしの場）
- 職場定着支援  
インフォーマルなつながり（卒業校OBのスポーツ仲間、児童施設の職員、職場の関係者）

結婚前に二人で訪れた伊豆で

た。私自身、これまでに7組の知的障がいのある人たちの妊娠・出産・子育ての「意思決定」にかかわり、その内5組は結婚し、現在では2組をグループホームで支援しています。

本稿で「意思決定」という言葉を使うにあたって、これまで使ってきた「自己決定」との違いがいまいちな中で、最近、制度用語として下ろされた「意思決定支援」が多く使われることには違和感があります。その点を論じることが今回の私の役割ではないので、最後に私なりに整理して触れることにします。

## 突き付けられる 意思決定支援

今回は、18年4月に出産を予定している夫婦（20代）の事例から考えてみます（本稿掲載について許可をいただいています）。

二人はグループホームで出会ってから1年後に交際をスタートさせ、結婚を考えるようになりました。ところが、二人とも異性にかかわる問題を引き起こしてしまい、ホームではそれぞれに問題解決

に向けた支援と結婚の意思確認を行いました。二人の希望から危機を乗り越えるための仲裁を行った結果、それぞれの意思を確かめあうために一定期間距離を置いて生活することになり、その環境調整もグループホームで行いました。

その後、結婚への意思が固まったことから、次のステップとして今年4月から二人での生活を体験し、最終的な意思決定をするために異例ではありましたがグループホームでの同棲生活を支援しました。あらかじめ性についての話しあいを行ったところ、二人は『できちゃった結婚』ではなく計画的に子どもが欲しい』とのことでした。しかし、距離が近くなったことで計画への意思が弱くなり、その3カ月後には妊娠が発覚しました。そこから、結婚のみならず出産・子育ての意思決定支援が始まりました。

この意思決定支援には、医療、福祉、職場、それにホームで結婚・出産・子育てをしている仲間もかかりました。二人は結婚して出産を「したい」という気持ちでしたが、二人の親からは支援が期待できなかったので、出産と子育て、仕

事との両立などを「する」ために必要なことをまずは自分たちで考えてもらい、「こうしたい」から「こうする」に向けて関係者との話し合いを重ねました。そうした過程の中で、二人は希望する暮らしを実現するためには多くの人による支援が必要不可欠であることを実感していききました。

そして8月には入籍し、9月の支援会議では二人の職場の社長や店長、出身児童養護施設の職員、福祉事務所ワーカー、ホーム職員などの関係者が出席して、二人は自分たちの意思決定とそれに向けて考えた計画を関係者に伝え、関係者ができる支援を確認しました。その後の二人は、二人三脚で自分たちの意思決定とその実現に向かって歩み始めました。

## 「意思決定」を「自己決定」につなげる連続性で考える

結婚という二人の意思決定は、揺らぎながらも身近な他者とのかわりによって支えられました。しかし、想定外だった出産・子育てなどの緊要な意思決定では、多様な他者がさらにかかわり、その

中でそれぞれが自分を見つめ、二人は自らの意思を実現させていきました。

意思決定支援には、その人の意思を引き出す支援だけでなく、決定において多様な他者との関係をつくることも車の両輪のように必要です。それによって、関係で支えられる意思決定は、その実現に向けても関係で支えられることにつながるのです。主観としての「私」の決定は、「私」を取り巻く関係の広がりによって、客観としての「私（自己）」として決定する「自己決定」となっていく連続性があると考えます。

知的障がいのある人の意思決定については、障がいの重い、軽いによって別のように取り扱われますが、人は関係性の変化の中で「私の決定」から相互的關係の中での「意思決定」、さらには社会的関係の中での「自己決定」につながる連続性で考えることが必要です。その視点がないと、「意思決定支援」は意思を引き出す方法という「形」に溺れてしまうものになると考えます。